



1年学年だより

発行日:令和7年 10月31日(金)

発行者:横浜市立南高等学校附属中学校

学校長:二上 直子 NO. 6



南極教室



MINAMI

校長代理 中澤 務

10月16日(木)の6・7校時、本校メインアリーナで国立極地研究所主催の「南極教室」が開催されました。衛星回線を通じて約14,000km離れた南極・昭和基地とつなぐという、大変貴重な機会をいただきました。当日は、現地で活動中の米村さん(附属中学校保護者の方)をはじめ、第66次南極地域観測隊の皆さんとオンラインでお話することができました。

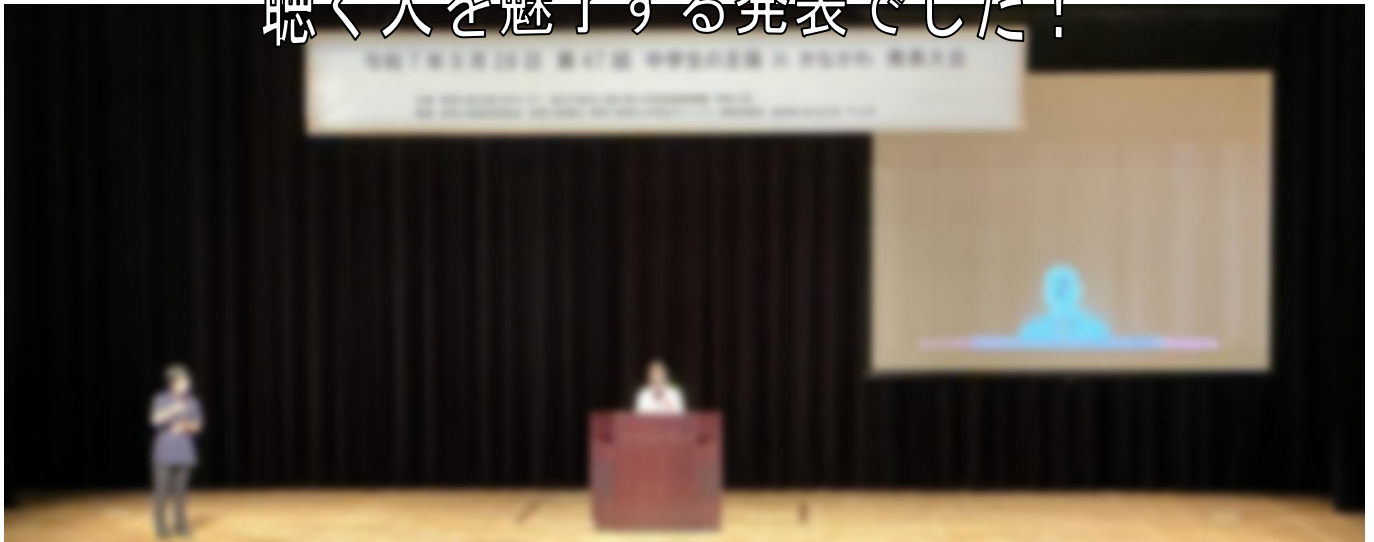
本来は基地の外から中継していただく予定でしたが、当日はブリザードのため、基地内部からの映像が中心となりました。それでも、短時間だけ映し出された風速20mを超える外の様子からは、南極の過酷な自然環境を実感することができ、附属中1、2年生の生徒からも驚きの声が上がっていました。

米村さんからは、観測隊の活動について詳しくご紹介いただきました。第66次南極地域観測隊は、隊員31名、平均年齢40歳(最年少26歳、最高齢63歳)で構成されています。越冬隊長1名のもと、観測部門12名は気象・大気・雪氷・オーロラ・海洋生物など多岐にわたる観測を行い、設営部門18名は機械・建築・通信・医療・調理・環境保全など、基地と人々の生活を支えています。夏隊は約2か月間、越冬隊はおおよそ1年2か月という長期間にわたり南極で活動しているそうです。

また、米村さんからは南極での暮らしにまつわる興味深いお話も伺いました。ブリザードが吹き荒れるときもあれば、静寂の中でクジラの潮吹く音が聞こえることもあることや、危険を伴うクラック(氷の割れ目)のこと、それぞれの基地と交わすグリーティングカードのことなど、南極の生活を実感できるエピソードに、生徒の皆さんは興味をもって耳を傾けていました。生徒から寄せられた多くの質問にも、隊員の皆さんが丁寧に答えてくださり、南極での研究や生活のリアルな一端を知ることができました。

私が印象的だったのは、米村さんが紹介してくださった初代越冬隊長・西堀栄三郎さんの言葉、「とにかくやってみなはれ」です。未知の環境に挑む姿勢は、南極地域観測隊の方だけでなく、どんな学びにも通じるものだと思います。今回の南極教室を通じて、生徒の皆さんには、まだ経験していないことにも勇気をもって挑戦する気持ちを大切にしてほしいと感じました。

聴く人を魅了する発表でした！



当日の発表の様子。撮影されていたり、手話による同時通訳があったりとプレッシャーのある中でしたが、物怖じせずとても素敵な発表でした。立派！

先月28日（日）に県立青少年センターで開催された「第47回 中学生の主張 in かながわ」発表大会に1年1組の■■■■さんが参加し、見事『優秀賞』に選ばれました。当日は、応募者835人の中から作文審査で選ばれた7名の中学生が、日頃抱いている想いや伝えたいことを自分の言葉で伝えるという、とても緊張感のある場でしたが、■■■■さんの発表は、優しく素直な気持ちが聴いている人を惹き付ける、とても素晴らしいものでした。■■■■さんと保護者様の了解を得て、受賞した作文を掲載しますので、ぜひご一読ください。■■■■さん、本当におめでとうございます（ぜひ年末の学年集会の時にみんなの前で披露してくださいね）。

「ちょっとの勇気、ちょっとの親切」

横浜市立南高等学校附属中学校 1年 ■■■■

「あなたは困っている人を見かけた時、ほんの少しの労力や時間を使って、人助けをすることはできますか。」

この質問に「できる」と答えられる人はどれくらいいるのでしょうか。荷物が多くて困っている人。ベビーカーを持ち上げて階段を登っている人。こんな人たちを見かけた時、
「手伝いましょうか。」

と声をかけられるでしょうか。きっと見て見ぬふりをし、通り過ぎてしまう人が大半ではないでしょうか。多くの人の心にはおそらく、「知らない人だし。」「自分が声をかけなくても別にいいだろう。」という気持ちがあると思います。

私は、この夏休みに美術館のワークショップのボランティアに参加しました。会場近くのパス停は日陰がなく、バスも1時間に2本しか通らない状況でした。ある日、日傘を忘れてしまった私は汗だくになりながら、なかなか来ないバスをひたすら待っていました。すると、隣にいた女性が、

「よかったら日傘に入りませんか？熱中症も怖いですし。」

と優しく声をかけてくれました。私はとても驚きました。私は、日傘に入れてもらいながら、見ず知らずの私を心配し、勇気を出して声をかけてくれたことが嬉しく、こんなに優しく親切な人がいるのかと、とても感動し、心が温くなりました。

私が参加したボランティアでも、素敵な出会いがありました。私は、ワークショップで、ある少女に出会いました。彼女は何回絵を描いてもうまく描けず苛立っていました。私が代わりに絵を描いてあげると、とびきりの笑顔になり、それを見ながら作品を作り上げることができました。私が描いた絵を大事そうに握りしめ、
「お姉さん、ありがとう。」

と言って会場を後にしていました。

私は2人との出会いを通して、心を寄せ、相手を思いやる気持ちの先には、誰かの笑顔があることに気づきました。そして、その行為はささやかな気遣いと勇気であると気づかされました。だからこそ、「困っているな。」と感じたらすぐに動くようになりました。海でプラスチックの袋やごみを見つけたら、すぐに拾うようになりました。以前は、「どうせ誰かがやってくれる。」と思って素通りしていました。しかし、もし、みんなが同じように「きっと誰かがやってくれる。」と思ってそのままにしていると、きっと海はごみだらけになります。だから、気づいた時に行動しなくてはいけないのです。誰かがちょっと心

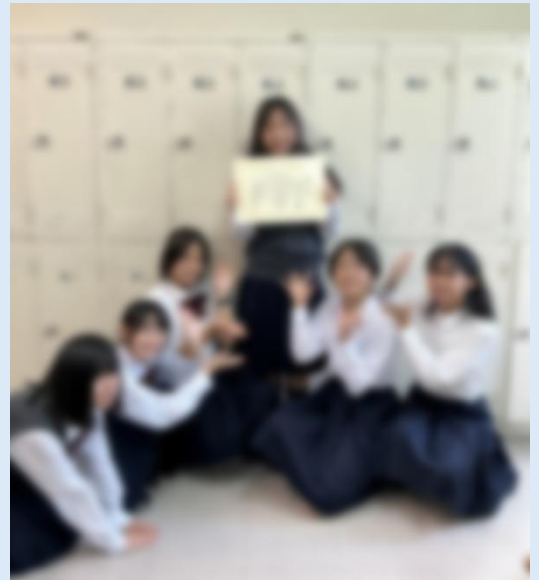
を寄せることで、助かる人がいます。その人が笑顔になれます。感謝している人がきつといいます。自分の行いは、どこかで誰かの役に立っているはずですが、しかし、行動する時には勇気が必要です。困っている人を見かけても声をかけるのは誰でも躊躇するものです。私もそうでした。しかし、困っている時に人から親切にされ、助けられた経験があると、「次は自分が誰かの為に何かをしよう。」「私と同じような思いを持ってもらいたい。」と思うようになることにも気づきました。

「ボランティア」は基本的に無償の奉仕活動です。そこに、どんな価値があるのかと問われたら、私は誰かの為に行うことだけではなく、その行いは自分の為になっていると答えます。私は、誰かを手伝ったときに感謝されると嬉しくなります。そして、自分が誰かに必要とされたと感じると、自分の存在意義を感じます。だから、報酬などの見返りがなくても、自分の心が温かくなれるのです。私が参加したボランティアでは、参加者が、皆、常に笑顔で楽しそうに活動しているのがとても印象的でした。

今は自分の為だけに時間やお金を使う人が増えていると聞きます。

自分さえよければいいという考えが広がっていった先には、冷たい社会が待っています。弱い立場にある人は切り捨てられていくのではないのでしょうか。人は社会の中で生き、暮らしています。様々な立場の人がいます。どんな人でも安心して暮らせる社会を目指すためには、助け合う精神が必要です。どんな人も生きていけば、必ず人と関わり、知らないところで誰かに助けてもらっています。社会の中で人は寄り添い合って生きています。

「情けは人の為ならず」ということわざがあるように、誰かにしてあげたことは、広がり、巡って、また誰かに自分が助けられ、戻ってきます。その輪がどんどん広がることで、世の中はもっと平和になり、人々が暮らしやすくなるのではないのでしょうか。そのような社会を皆で一緒に作っていきませんか。



さんと急きょ撮影に協力してくれた1組の仲間たち

最近あった、とってもうれしかったこと

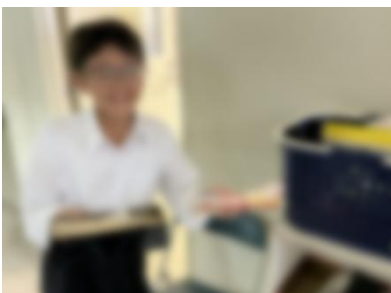
学年フロアには、昼食時にうっかり『お箸』を忘れてきた人用に『割りばしBOX』を置き、自由に使っていていいようにしています。使う生徒の多くが「先生、箸を忘れたので割りばしをもらっていいですか」としっかり言いに来てくれて、このちょっとした言動からも、南高附属中1年生の礼儀正しさを日々感じていました。



寄付してくれた大量の割りばし

そんなある日、少し割りばしが減ってきたなと思い、職員の方で補充をして「これでしばらくは大丈夫だな」と話していたところ、それから3日も経たないうちに、補充した割りばしが半分以上も残っていないという状況になっていたことがありました。あまりの減りの早さにびっくりしてしまい、ある日の昼食時に「みんな、割りばしを使うのはいいけど、ちょっと減りが早いんじゃないかな？なるべく忘れないように気をつけようね」と全クラスに、そのようなことを軽く呼びかけて回ったのです。

すると、翌日1-4のさんが「先生、家にあったのを寄付します」と200本近い割りばしを袋に入れて持ってきてくれたのでした。あまりの多さにびっくりしたのもそうですが、前日に何気なく話したことを覚えていてくれて、翌日にわざわざ持ってきてくれたことに、私の心は熱くなり、その日の午後の授業はいつも以上にテンションが高かったことを覚えています。その後も何人も生徒が大量の割りばしを寄付してくれることが続いたのでした。寄付してくれた生徒の皆さん、本当にありがとう。



1-1のさんも寄付ありがとう！

授業や自分のクラスに関係のないことでも、今回のように気にかけて、そして行動にうつしてくれる生徒が、この学年にはたくさんいるということ。
さらに言えば、相手やクラスを気にかけて動いてくれたり、心配してくれたり中々言いづらいことでも、先生たちに「〇〇のことで相談があるのですが」と話してくれたりする生徒がたくさんいるということ。この半年、関わってきて感じた、この学年、14期生の率直な印象です。

このような学年の『よさ』をもっと伸ばしていきたい、もっとみんなにとって居心地のよい学年にしていきたいと強く感じた、そんな、とってもとってもうれしかったことでした。